

## 父が自分の身を呈して教えてくれたこと

高名 祐美

私の父は、2023年5月23日、90歳を目前にして89歳の人生を閉じた。その日は、私の孫（次女の長男）が3歳となった誕生日だった。3月に家でころび、動けなくなり入院。入院生活1ヶ月で在宅療養に切り替え、1ヶ月を自宅で過ごし、父が愛してきた家族に看取られ最期の息をついた。

次女である妹夫婦、孫と暮らしていた父に突然訪れた要介護状態。一日にして寝たきりになってしまった父。思うように動けなくなり、治療もできない状態となった父から発せられる言葉や行動から、いくつものことを教えられた。父との生活を振り返り、父が自分の身を呈して教えてくれたことを書いてみようと思う。

### I 家に連れて帰ろうと決めた日

#### 【父の病気】

父は、長年の喫煙からくる「肺気腫」「慢性閉塞性肺疾患」で通院治療を受けていた。2021年6月に早期胃癌が見つかり、内視鏡手術を受けたことをきっかけに、在宅酸素療法をうけることになった。数年前から医師からすすめられていたが、父は拒否していたらしい。手術・入院をきっかけにようやく自分の体に必要なものを受け入れた。医師から「常時、マラソンをしているような、そんな肺の状態ですよ。酸素すると楽になります。手術も呼吸の状態によっては途中で中止することになるかもしれません。」と説明を受け、ようやく納得した。そして酸素を常時吸入するようになり、父は「楽だなあ。」と。一方で「これ（酸素）はいつまで続けるんだ？いつになったらやめられる？」と何度も私や妹にたずねていた。在宅酸素療法生活が始まり、週1回の訪問看護を受けるようになった。

#### 【長女としての役割】

父が通院していたのは、私が38年間医療ソーシャルワーカーとして勤務した病院だった。運転免許を返納し車も手放した父には、通院の付き添いが必要だった。同居の次女がその役割を担っていたが、私が定年退職したことで、通院の付き添いは長女の私に交代した。携帯用濃縮酸素器をひっぱりながらの外出は、父にとっては大仕事だった。

定期診察日に実家へ父を迎えに行くと、父は酸素器を引っ張りながら、「ありがたいな。こんなもんあるから簡単に歩けない。」と必ず口にしていた。受診をすませ、病院の帰りにコンビニでお菓子を買ったり、補聴器の電池交換に行くこともあった。自分の生活にゆとりがなく、父のことを気にしながらもあまり足を運べなかった実家。「通院の付き添い」「外出の支援」「訪問看護の同席」という明確な目的ができたことで定期的に実家に行くようになった。父と二人で過ごす時間ができた。娘として恩返しができるような、そんな気持ちだった。

2つ違いの妹が定年退職し、父の通院付き添いは再び次女の役割となった。定期的に実家へ足を運ぶことがなくなり、妹からの相談に応じること、ひ孫を連れて不定期に会いに行くことが私の役割になっていた。

#### 【父が要介護状態になった】

そんな日々。2023年3月20日の朝、妹から電話があった。「父が動けなくなっている。トイレに行こうとしてころんだらしい、腰を痛がっている、どうしたらいいか。」と。訪問看護師に電話をするように伝え、すぐに父の元へ向かった。訪問看護師からの指示は、「整形外科に受診が必要。病院に連れてきてください」と。それで病院に連れて行こうとするが、痛みで立ち上がることもできない。そんな父をおぶって車にのせたのは、当時引きこもりの生活をしていた33歳の孫息子だった。このとき、救急車を要請していたら、訪問看護師が緊急訪問してくれていたら、父を長時間つらい思いをさせずにすんだのかもしれないと今になって思い、後悔が残る。しかし、孫がこのとき動いてくれたことは、嬉しい変化だった。

私は病院に直行し、妹と合流。車椅子に座って診察待ちをしている父はとてつらそうにしていた。診察待ち患者が多く、なかなか順番が回ってこない。父を寝かせてやることもできず、時間だけがたつ。そして待つこと2時間半。診察室で受けた診断は腰椎圧迫骨折だった。痛みが強く動けないため、そのまま整形外科入院となる。

その後のMRI検査で、腫瘍による病的骨折と判明。主治医からは、今後の治療を考えるためには、原発がんの確定診断が必要と説明をうける。現時点でもっとも疑われるのは前立腺がんということで、泌尿器科の検査・病理生検をすすめられた。父にその旨説明をしてほしいと医師に伝え、泌尿器科医師から父に必要な検査について説明をもらった。その場に私と妹も同席した。

Dr：三輪さん。泌尿器科の〇〇です。

父：泌尿器科？ですか。

Dr：はい。三輪さんは骨折で入院したんですけど。骨に癌があるんですよ。

父：（表情がくもる）癌？ですか・・・

Dr：（父の表情をみて）癌のようなものがあるんですよ、それで骨折したんです。その癌のようなものが、どこからきているのか検査したいんです。前立腺からきているものかもしれないので、生検といって、針を6箇所さして細胞をとってきます。それではっきりわかったら、治療をします。そんな検査を受けてもらいたいんですけど、どうですかね。

父：前立腺・・・

私：その検査ではっきりわかったら、痛いのも治療できるのだから。

父：・・・ わかった。

Dr：検査、してもいいですか。

父：はい、お願いします。

泌尿器科の若い医師が父に最初に伝えた言葉には驚いた。しかし、父は納得したようで検査を承諾した。

3月30日、検査当日。入院して10日目。午後から検査で、病室で待機するように言われ、私と妹は病室で検査が終わるまで待っていた。

その時に妹と交わした会話。

妹：結果はどうなんやろうな～ 前立腺がんだったら、治療できるって言ってたよね。

私：うん。前立腺がんの骨転移、けっこうあるからね。ホルモン療法とかするのかな。

妹：最悪、動けなくても痛いだけ落ち着いたらいいな。

私：そうだね。骨にできた癌はどうにもならないし。前立腺がんならその痛みも治療で軽減できるって先生話していたよね。そうだったらいいなあ。歩けなくても車椅子に座って過ごせるようになって、退院できたらいいね。

妹：うん。もしも、前立腺がんではなかったとして、もう治療もできないようなら、私はうちへ連れて帰ってみてやりたい。寝たきりでもかまわない。

私：そうか。そうしようという気持ちなんだね。私もそれがいいと思う。介護は大変かもしれないけれど、何でも利用できるものは活用しよう。そこらへんは私にまかせておいて。

妹：うん。頼むわ。金にいとめはつけないよ、私も頑張る。

私：わかった。そうしようか。

そんなやり取りを姉妹でし、お互いの気持ちを確かめあった。

検査の翌日から父は発熱し、痰の量も増え、大好きな飴も水分もとめられて

しまった。3月31日、主治医から呼ばれ、現状について説明をうける。  
Dr:入院してから段々と全身状態が悪くなっています。整形外科でできることは腰や足の痛みへの対処しかないんです。前立腺がんでなければ、肺がんの可能性が高い。しかし、呼吸器内科の先生は週1回の非常勤、当院には専門医がいません。病院をかわるか、内科に転科するか、ホスピスのようなところに行くか。どうしますかね・・・ 肺の状態が悪いので、急変の可能性もあります。そのとき、延命治療は希望されますか。

私:(これぞDNRの確認か・・・) 延命治療は希望しません。私が長年働いてきた病院です。スタッフも信頼しています。父もずっとここに通院してきました。病院をかわることは考えていません。内科への転科も希望しません。このまま先生に主治医でいてもらいたいです。肺が気になるので、これまで週1回みてもらっていた呼吸器の先生から現状の説明を受けたいです。

Dr:わかりました。腫瘍が神経を圧迫してきているので、足がしびれてきてこのまま動かなくなると予測されます。肺については、常勤の内科の先生と相談させてください。呼吸器の先生からは説明をきいてください。

私:先生、父に足のしびれと動かなくなるかもしれないことを先生から説明してやってください。父はなぜ自分がこんな状況になっているのか、わからないし、不安な気持ちでいます。よろしく願いいたします。

Dr:わかりました。伝えます。

#### 【家に連れて帰ろうと決めた日】

そして生検の結果、前立腺がんは否定された。

4月10日、呼吸器の医師より外来の診察室で説明を受ける。

Dr:(CTの画像をみせながら) 肺がんの可能性は低いです。確定診断するにはPET検査や気管支ファイバーの検査が必要です。しかしこの病院ではできない。退院した後外来で受けてもらうことになります。

私:退院して外来で他の病院に受診なんて、今の状態ではできません。前立腺がんは100%ないと泌尿器科医から説明受けました。

Dr:いや、そうは言い切れませんね。血液検査のデータからは前立腺がんも否定できないと思います。ここに少しみられるのが肺がんかもしれませんが、肺炎の治療をしたら縮小しています。なので、肺がんではないと思います。

私:確定診断されたとしても、今の父の状態では治療ができるとは思えません。私達が望むのは、痛みや苦痛を少しでも緩和してほしいということです。

Dr:それは、在宅療養を考えているということですか。

私:(妹と顔を見合わせてから) はい。そう考えています。

妹：（私の言葉にうなづく）吸痰が怖くて・・・あとは、なんでも私が介護します。そして痛いのはとってやってほしい。

Dr：わかりました。在宅をとということであれば、病院と相談してすすめてください。痛みは医療用麻薬を使っていきましょう。痰を減らすことはむずかしいです、肺の中にある痰はとれませんから。

私：これから病棟の方と相談して、家に連れて帰る準備をしていきます。痛みの軽減をお願いします。

こうして、父自身の言葉を聴く前に、思いを把握する前に、娘たち二人で在宅療養を選択することを決めていた。2023年4月10日、入院して21日目のことだった。

（次回につづきます）